

言葉との邂逅

「きけ わだつみのこえ」日本戦没学生の手記

日本戦没学生記念会編 ○岩波書店

何も知らない子供たち。彼らはあれでいい。みじめなのは俺たちだ。

なぜ、読書をするのか。

そう問われれば、「言葉との邂逅」を求めて、と答えるだろう。

かつて、亀井勝一郎が、「読書とは、著者の魂との邂逅である」と語ったが、されば、読書とは、著者の魂が紡ぎ出した言葉との邂逅、とも言えるだろう。

その「言葉との邂逅」を求めた読書遍歴の中でも、若き日の私の心に突き刺さってきた言葉が、「きけ わだつみのこえ」という書に収められた、この一文であった。

これは、第二次大戦の末期、二十余歳の若さで徴兵され、戦死していった学徒兵たちの手記だが、それらの手記からは、どの一文も、死を覚悟した人間の魂の叫びが聴こえてくる。

それゆえ、この書は、生半可

な覚悟では読めない。魂の叫び

の言葉を読むためには、こちらも魂で正対し、その言葉と格闘する覚悟がなければ、読み進むことができない。

しかし、ひとたび正対して読むならば、二つのことを教えられる。

一つは「自らの精神の未熟さ」。彼らは、二十余歳の若さであるにもかかわらず、その文章が、見事なほどに成熟している。それは、この時代の大学教育の水準の高さでもあるが、決してそれだけではない。

彼らの言葉の成熟は、何よりの成熟に他ならない。省みて、現代の我々の精神が未熟であるとすれば、それは、究極、「死に対する覚悟の欠如」であること

を教えられる。

もう一つは「自らの境遇の有難さ」。

この手記の中には、「国を守るため、立派に死んでいきます」という言葉や、「父上、母上、有難うございました」といった言葉が多い。その言葉からは、理不尽な戦争と不本意な死の前に、それでも自らの感情を抑制し、理性的にそれを受容しようとする格闘が伝わってくる。

しかし、むしろ、我々に深く突き刺さってくるのは、この赤裸々な言葉であろう。

「何も知らない子供たち。彼らはあれでいい。(戦争はまもなく終わるのだから) みじめなのは俺たちだ。一昔前の人たち。俺たちよりはましだ。人間らしい生活を、少しでも送ってきてい



るんだもの」

この言葉から伝わってくるものは、「なぜ、我々は、こんな不幸な時代に生まれたんだ」という叫びである。

そして、この叫びを、心の奥深く受け止めるとき、彼らに比べ、我々が、いま、どれほど恵まれた時代と境遇に生きているかを、教えられる。

そして、その恵まれた境遇を与えられた我々が、いかに生きるべきかを、考えさせられる。



田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK